学生主体の環境マネジメントの活性化について

藤原　勇
鳥越　薫

要旨

共通教育で開講している「環境と人間」の授業で「山口大学生（以下，学生と略）の環境マネジメント活動をどう活性化したら良いか」課題を出し，経済学部一年生からの回答をまとめてみた。学生は著者の「環境と人間」の授業の中で初めて山口大学（以下大学と略）の環境マネジメント活動，即ち環境負荷削減対応の取り組みに大変驚いている。同様に山口大学生活協同組合（以下，生協と略）の取り組みへも関心を持っている。学生は，大学の環境マネジメント活動を知る機会がないと感じており，環境関連の授業を座学だけではなく実習も要望している。大学は環境マネジメント対策部会が中心になって環境配慮活動を行っており，学生の参画は無い。ここでは学生視線からの環境配慮活性化策及び大学や生協への環境活動への要望についてまとめてみた。学生は部活，サークル，ボランティア活動を主体に環境活動を活性化できると考えている。

キーワード

経済学部一年生，環境マネジメント，環境報告書，環境と人間

1 緒言

世間ではSDGs，カーボンニュートラル推進等に見られるように組織的な環境マネジメントが話題にならない日は無い。大学では，環境マネジメント体制に基づき環境負荷軽減に全学で取り組んでいる。その活動をまとめた物が環境報告書である。平成 16 年から発行が義務化され，毎年成果を綴った報告書をホームページに掲載している。著者は共通教育開講の「環境と人間」で大学の環境マネジメントを説明し，環境マネジメントへの取り組み及び生協の環境負荷削減を取り上げている。大学の環境マネジメント活動については自主的に環境活動に参加した学生，または講義等で説明を受けた学生以外は知らない事がわかった。今回，「環境マネジメント活動を学生側から活性化するにはどうしたらよいか」の課題を出し，その回答を整理した。学生は，大学の環境の授業を希望し，実習活動を伴うカリキュラムも希望していた。さらに大学に対して環境情報の充実を要望している。また，学生は部活，サークル，ボランティア活動を主体に環境活動の活性化が可能と思っている。

2 大学の環境配慮情報

2.1「環境と人間」の講義

著者は共通教育の「環境と人間」の講義をオムニバス担当の 1 人として行っている。令和 4 年度は 4 学部，約 500 人の学生相手に，大学の環境報告書の内容及び環境マネジメント活動についての概要を説明した。関連して学生生活から発生するCO_2量の算出をレポート課題として提出することで環境負荷量を実感してもらっている[1]。この度「学生の環境マネジメント活動をどう活性化したら良いか」学生の視点で考えてもらうことにした。経済学部一年生 107 人からの回答を整理した。

2.2 山口大学環境報告書

山口大学環境報告書（以下，環境報告書と略）は，施設環境部から毎年９月末に発行される。１年間掛けて編集され，各組織の代表からなる山口大学環境マネジメント対策部会（以下，部会と略）及び上部組織の環境マネジメント推進部会で承認後に発行となる。しかし，構成員の約８割を占める学生の部会への参画については実現していない。学生関連の記事は，部局及び生協担当者を通して収集されるが，環境マネジメントに対する学生の意見を直接聞く機会はない。将来，学生も参画しての環境マネジメントの活性化，学生視線での環境報告書の編集・発行が望まれる。

3 結果と考察

3.1 学生の回答

学生の環境マネジメント活動の活性化への提案は，多岐に渡り相互に関連する物も多くあった。これらには学生が知らないだけで，すでに大学・生協・地域が取り組んでいる物も含まれた。ここでは学生の提案を項目別に整理した。

3.2 学生の環境への意識

環境問題に対して実感がなく，地球温暖化について深刻さを感じていない学生もいることがわかった。また，環境への漠然とした思いから，環境配慮の視点からの物事の善悪について理解ができない，と感じている学生もいる。さらに環境問題解決への手段を見つけられず，拒否反応を感じている学生もいる。ごみの分別方法も詳しく知らないことから例えば，スマホ充電用のバッテリーは燃えるごみでよいと思っている学生もいる。身近な山口市のごみ収集場でバッテリーが原因の発火事故の話から，危険な物だと改めて認識することになる。

学生は４月に入学し大学の構成員となる。オリエンテーションでは単位修得，生活上の注意が行われるが，大学の環境マネジメントの説明は無い。学生の意識は単位修得，アルバイト，部活またはサークル活動であり，環境への関心は低い。環境報告書の内容を聞くまでは大学の環境マネジメント対策について意識していない。学生の情報源は，授業，生協の掲示板，先輩， SNS であり，大学の環境マネジメント情報については，授業として教えてもらいたいとの要望が多かった。

3.3 環境マネジメント意識をどうしたら活性化するか

学生の環境マネジメント意識を活性化するには，大学の現状を学生に知ってもらうこと，環境活動に参加することである，と学生は気がついている。大部分の学生が大学の環境マネジメントの情報が入らない，と感じている。学生は講義，実習・イベントに参加することで学生自信の啓蒙，環境問題に関する意識づけが期待できると考えている。姫山祭や七夕祭の活用も期待している。さらに，地域と連携として学外のごみ拾い，ボランティア活動への参加をあげている。主体的に実践可能であるサークル活動やボランティア活動が有効と考えている。これらの活動が活動していない他の学生への波及する事も期待している。提案の一部を以下に示すが他にも多くあった。1)学内放置自転車を修理後に新入生に販売する。これは過去に同じ目的のサークルが活動してたが現在は休部となっている[(2)]。2)大学内で教科書等の古本回収と販売。古本回収は現在大学が取り組んでいるが，小規模で学生が集まって随時企画可能な行動であることがわかる。

3.5 大学への要望

学生は大学に対して環境配慮活動の提供を希望している。具体的な物も含めてとして，１）大学のキャラクターである「ヤマミイ」の看板・情報媒体としての活用，２）リユース・リサイクル掲示板，ポスター掲示の増設，環境ホームページの充実，環境活動紹介・活動動画の作成，３）大学の電気使用量や水道

光熱費の資料掲載，を取り上げており，４）新たにパソコンや備品等不要品を再利用する為の大学ホームページの設置，５）大学構内のごみ箱の増設，もあげていた。

3.6 生協の活用と要望

生協施設は飲食する福利厚生施設だけでなく，イベント場所及び情報発信の場所としての活用を提案している。資源ごみ回収場所の提案として，1)新規に資源ごみである新聞紙，ペットボトル，プラスチックの回収，2)既存の活動であるリサイクル弁当箱（リ・リパック）の回収率の改善策として，(1) 分かりやすい説明資料作成，(2) アルバイトによる回収頻度の増加，(3) 回収場所の増設，をあげていた。また環境イベントとして，環境クイズ[3]をイベント期間中に利用者に解答してもらうことで意識を高め，さらに正解者への生協ポイント付与をすることで活動が活性化すると考えている。

3.7 環境授業の充実

環境授業に関しては，共通教育科目においてSDGs関連の授業を希望。さらに，高学年で単位認定カリキュラムのフィールドワーク，イベント付きセミナー，ゼミ，授業外の環境講演会に参加，清掃活動への参加，ボランティア活動，社会奉仕作業への参加等を挙げていた。

3.8 イベントの企画と参加

学生のイベント参加が意識を高めると学生も感じている。定期的に開催する大学や地域の活動が有効と感じている。活動は多岐に渡っており，１）植林やごみ拾い，2)小中学生を対象にしたリサイクル教室や環境教室の大学生による開講，３）環境対策コンテスト，４）中四国大学または全国の大学との共同活動，５）自然体験学習，６）地産地消となる地域商品を用いた料理レシピの作成と配布さらに特産品販売をあげていた。

3.9 環境情報の発信

学生は大学の環境情報の発信は講義以外に必要と考えている。大媒体として，修学支援システムのお知らせへの利用，大学正門への掲示版の新設，インスタグラム，TikTok等のSNS媒体を提案している。

3.10　大学の環境情報

この度学生が意識した大学の環境情報を以下に示した。１）2022年の環境報告書[4]に記載の「THE大学インパクトランキング」が国内15位，SDGs13「気候変動に具体的な対策」が国内２位の記事について，２）環境スローガンの取り組み，３）大学の消費エネルギー量，廃棄物排出量と前年比のグラフのデータ，４）フードバンクポスト設置及び食品ロス削減の取り組み，５）ごみの分別方法等々があり，大学の環境活動に目が向いたと思われる。

3.11　学生への効果

大学の環境配慮活動を知る事で，学生は節電やごみに関する意識が高くなる。環境クイズに回答する事でより幅広い知識が習得できる。さらに環境活動に参加する事によって社会貢献への意識が高まる。これらの結果から，学生の日常生活においてごみの減量，電力料金等の削減のコツが身につくと感じている。

4 結語

「環境マネジメント活動を学生側から活性化するにはどうしたらよいか」の課題に対して経済学部一年生から回答をまとめた。大学が既に多くの環境配慮活動を行っており，その周知機会が少なく，学生が知らない事からの回答も出てきた。しかし，学生視線から多くのアイデアや提案があった。学生が環境に関心が高い事がわかり大変参考になった。これらは学生を支援する資料として活用していきたい。

学生は大学の環境マネジメント活動の話を聴くまでは何も知らなかったが，講義後は大学の環境配慮への取り組みの多様さに驚いていた。同様に生協への取り組みも大変関心を持っていた。さらに生協と協力した資源ごみ

回収拠点と，情報発信源の拠点を生かしたアイデアが多く出た。学生は大学に対して環境授業関連の充実を希望していると同時にSNS等の情報発信量の充実，環境活動内容の充実について提案している。さらに学生の自主的な活性化母体は部活，サークル，ボランティアの活動と考えている。

学生は何がしら活動に参加することで，生活を見直すきっかけになると感じている。まずは，環境情報が入手できること。それから機会を見つけて行動する事で自身も周りも活性化すると思っている。大学，地域，生協は学生の環境活動をサポートできる環境を作っていく必要がある。

（教育支援センター　准教授）

（施設環境部　副課長）

【参考文献】

(1) 藤原勇，2022，大学生活の二酸化炭素排出量について一考察―山口大学生の生活における二酸化炭素排出量―，山口大学大学教育機構・大学教育，第19号， 62-66 。

(2) 茨久和，安部雄樹，冬野聖田，篭照喜，青木柾仁，2007，エコファイターズ―キャンパスエコ・エコシティを目指して―，山口大学環境保全，第23号， 3-5 。

(3) 2016，山口大学環境報告書2016， 15-16 。

(4) 2022，山口大学環境報告書2022，24 。